宇宙ステーション利用による地域活性化イベントについて
宇宙植物等、東北復興宇宙ミッションのレガシーを活用して

○長谷川洋一（一般財団法人ワンアース）
加藤修（株式会社ヘッズ東京本社），町田誠（一般財団法人公園財団），
加藤茂男（株式会社ヘッズ東京本社），守屋慎一郎（合同会社企画室）

キーワード：国際宇宙ステーション　東北復興　大阪万博

【１】目的：　東日本大震災からの復興と世界への感謝の気持ちを国際宇宙ステーション（ISS）から発信する「東北復興宇宙ミッション 2021」（復興庁東日本大震災発災 10 年復興発信事業・文部科学省後援事業・第 10 回 JACE イベントアワード優秀賞）が、50 あまりの地域の参加のもと NASA、JAXA、宇宙飛行士の山崎直子氏や野口聡一氏の協力を得て遂行した。宇宙を実際に使ったイベントとしては空前の規模だったと言えるだろう。宇宙から発信した動画撮影用に野口宇宙飛行士の背景に拡げられた絹の横断幕は、EXPO 2025 大阪・関西万博への出展も決まっている。並行して各地から宇宙飛行した植物の種などの記念品が、復興の、次のフェーズの地域創生に活用されている。ここでは、各地のイベントや広域交流の様子をお伝えし、「ビジネスではない」宇宙の活用法を提唱する。

【２】方法：　各自治体に依頼して、東日本大震災被災地等の復興 10 年の様子を表現する画像を集め、長さ７メートルの絹羽二重に印刷した。これを福島県川俣町の小学 6 年生 14 名に縫製してもらい横断幕に仕立てた。幕の襟足には日本を助けてくれた世界中の国の言語で「ありがとう」と記してある。これを NASA ロケットで打ち上げ、野口聡一宇宙飛行士の手で日本実験棟「きぼう」船内に展示してもらった。野口氏には、アナウンサー役も務めてもらい、貼り出した横断幕の前に立ち（浮き）被災者を代弁して世界への感謝のメッセージを読み上げてもらった（原稿は、あらかじめ被災地で公募により集めた 550 通に及ぶメッセージを、東北の大学生有志が分析＆要約した）。この動画は JAXA の筑波宇宙センターに電送し、チェックを経て震災 10 年の節目である 2021 年 3 月 11 日に公開した。この撮影で使用した横断幕は NASA の宇宙機で地上に降ろし、縫製した川俣町を起点に、町から町へとリレーすることにした。これと並行して、後に残る価値を創造するため、各地から 10g 程度の「記念品」を預かり、

別の NASA ロケットで ISS に打ち上げ、約一ヶ月後に地球に帰還させた。この記念品（多くは花や野菜の種）を、ポスト 10 年の復興に活かすため、ワンアースは地域でのワークショップや地域間のコラボ促進イベントを行っている。特に大きな広域交流イベントとして「復興宇宙サミット」を設計し、2023 年、24 年と 2 回にわたり開催した。

【３】結果

（１）宇宙横断幕の活用：宇宙から戻った横断幕のリレーはほぼオール東北で完了し、多くの一般市民に公開した。首都圏でも、三菱重工の力を借りて、みなとみらい技術館（横浜）で約四ヶ月間公開した。さらに、Expo2025 大阪・関西万博での展示も決定している。

（２）宇宙特産品の創生：宇宙帰りの種等から「東北復興宇宙酒」や福島県川俣町の「宇宙蕎麦」、宮城県塩竈市の「宇宙白菜餃子」、岩手県洋野町の「宇宙シイタケ」などが、すでに商品化され販売されている。当学会の研究助成をいただいてチームで研究し、各方面のご厚意を得て、2023 年 4 月から仙台市で開催された全国都市緑化フェアに「宇宙ガーデン（宇宙白菜、宇宙ナデシコ、宇宙ルバーブ、宇宙古代米）」を出展し、大きな注目を集めた。また宮城県多賀城市では、宇宙飛行したわずか 10g の種籾を大切に増やし、2024 年には田圃 3 枚に植え付けるほどになった。この貴重な財産を次世代の子どもたちに受け継ぐため、市内の小学 5 年生全員（約 550 名）を動員し、宇宙古代米の田植え・稲刈り、そして給食で食べるという学習を行っている。

（３）宇宙サミット：各地域での宇宙飛行のレガシー活用に留まらず、地域や世代の枠を越えたコラボ促進と伝承を狙い、ワンアースでは「サミット」を設計し、2017 年以来、コロナを挟んで毎年開催している。直近では 2023 年 8 月に楢葉町、2024 年 7 月に浪江町で開催した。このサミットには被災地外から多くの中高生（震災を知らない子どもたち）が集まり、被災地の現状と復興の今を体感している。人生観・価値観が変わったという若者も多く、今ではワンアース青年部が自然に形成され、イベント運営をスタッフとして手伝ってくれている。

【４】考察：　今回報告した一連の宇宙事業は、いわゆる「宇宙ビジネス」ではなく、宇宙の文化利用であり、誰もが参加できる宇宙イベントのコンステレーションとして、ほぼ未開拓の分野と言えるだろう。ワンアースは、イベント学会の指導を受けつつ、今後もこの分野の先端をラッセルし、宇宙開発の社会的意義を内外に問い続けていきたい。